

40年ほど勤めていた会社を辞め、個人事務所を立上げ、大学の非常勤講師や法人の顧問などの仕事を始めて数か月が経過しました。新型コロナウイルスの影響は残っているものの、重症化などのリスクもある程度落ち着いてきたことから、8月から9月にかけて妻と英国の大学客員研究者として滞在している娘を訪問しました。

2月からのロシアによるウクライナ侵攻の影響を受け、全日空はロシア上空を避けて、中央アジアを飛ぶ「南回り」を選択しており、15時間40分ほどのフライトでした。新型コロナウイルスの第7波が収まっていない時期でしたので、日本出発便はガラガラ…。3列シートを横になって寝られるほどでした。

英国には、多くの世界遺産があります。世界文化遺産であるロンドンのウエストミンスター大寺院、Bathの語源になったともいわれるバースや、世界自然遺産のジャイアンツ・コースウェー（北アイルランドにある正六角形の無数の石柱群）などには、以前、英国出張の合間を縫って訪れたことがあるものの、湖水地方やストーンヘンジは初めてでした。



英国カンブリア地方の湖水地方は、今から約15,000年前の最終氷期の終了とともに形成されたと考えられており、氷河が衰退するとそのあとには氷河が土砂を削り取ったU字谷などが残り、多くが水を貯めこみ湖になりました。絵本ピーターラビットの作者ビアトリクス・ポターなどが愛した場所であり、自然の景観がとても美しかったです。フットパスが至るところに整備され、老若男女がウォーキングを楽しんでいるだけでなく、湖で泳いでいる人たちもいました。世界遺産に登録されたのは、2017年と遅かったのですが、有数のリゾート地・保養地としても知られ、外国人よりも英国内の人々が多い印象でした。

ストーンヘンジは、ギリシャ・ローマ時代より以前、紀元前2500年から紀元前2000年の間に立てられた直立巨石であり、一度はこの眼で見たかった場所です。私が訪れた8月末は、英国のナショナルホリデーと重なった3連休でしたので、外国人を含めごった返していました。じっくり見学をしている余裕はなかったのですが、人々を圧倒する存在感は十分感じました。なぜ4000年以上も前にあのような巨石を大平原に立てたのか、倒れないよう安定させるため石と石の間に凹凸を設けるなどの高度な技術はどこから習得したのか、など興味は尽きないのですが、研究者らの研究成果を待ちたいと思います。



世界遺産はユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が登録し、保護してきたことはよく知られています。ユネスコは文化財保護を行っている国連の専門機関ですが、そのユネスコ憲章の前文に注目してほしいと思います。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信の為に、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。…」

私は学生時代、ユネスコ研究会というインターカレッジサークルに所属し、ボランティア活動をしていました。このユネスコ憲章の前文は、当時もサークル仲間と語り、熱く議論されてきました。この前文は私の心の中に残り続け、2011年にはパリのユネスコ本部を訪ねています。

ロシアのウクライナ侵攻が長期化する今、ユネスコ憲章前文に謳われている「**平和のとりで**」を築くことが何より重要だと改めて感じているところです。国連による紛争解決は限界がある点はよく指摘されておりますが、他に適切な解決策が見つからない以上、国連機関である、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の他にも、ユニセフ（国際連合児童基金）、WIPO（世界知的所有権機関）などへの支援・協力を行っていくつもりです。

今回の渡英を通じて、先人の築いてきた素晴らしい文化やかけがえのない自然の美しさ・地球を護ることの大切さを痛感しました。一人ひとりのできることは限られていますが、心の中に「平和のとりで」を築き、「プラネタリー・バウンダリー」（地球の限界）を意識して、一歩ずつ前進していきたいと思えます。